

いのちの水

二〇二一年 十月号 第七二八号

目次

・新しく生れる	1
・老年の苦しみと恵み	3
・石の心と肉の心	5
・集会だより	16
・報告	
「祈りの友 合同集会」	16
・お知らせ	
北海道 瀬棚聖書集会	



(イワギキョウ)

求めよ、そうすれば与えられる。
門をたたけ、そうすれば開かれる。
(マタイ福音書7の7)

新しく生れること

「闇は光に勝利しなかった」

ヨハネ福音書の最初の部分

にこの言葉がある。(一の5)

二千年前にこの世に来たキ

リストという光は闇の中で

輝いている。これはどんな

深い闇の中でもいかなる状

況の中でも輝いているとい

うことである。

そしてその暗闇は光に勝利

しなかった(*)とある。

(*) この勝利すると訳され

る原語はカタランバノー。ラ

ンバノー(取る)の強調形。こ

の言葉は、つかみ取る、という

意味にも使われる。それで「理

解する」とも訳されることがあ

る。掴み取るということから

「打ち勝つ」(overcome)とい

うことになった。

最初の1節から5節までは

この世界全体の真理を書い

てあり、そこで光は、闇に

うち勝っていることが強調

されている。

これは、キリストが逮捕

前の最後の夕食時の一番最

後に言われたのが「私は世

に勝っている」であり、キ

リストは、サタン、闇の力

そのものに勝利していると

いう言葉であり、それに対

応している。

この11節から、ロゴスが繰

り返されているが私たちに

とっては「キリスト」と置

き換えて読むとよくわかる。

この世界、その人々は、キ

リストによつて創造された

のにこの世はその創造主を

認めなかった。(知らなかつ

た) (*)

キリストは自分の民のどこ

ろに来たのに神の民である

ユダヤ人は受け入れことし

なかった。闇は光に打ち勝

たという意味で多くの訳も

そうしておりますが、一方

では闇は光を理解しなかつ

たと訳されることもあるの

は、この原語が二通りの意

味を含んでいるからである。

神の民は真理であるキリ

ストを受けられなかったが、

現代もまさにそうなので

す。最初ローマ帝国も全体

が受け入れなかった。ロー

マ帝国でも南アメリカに入

ても迫害され日本において

も三〇〇年ほどにも及ぶ期

間、迫害されたという歴史
的な事実がある。

そして、これを単にこの時
のことだけではなくって歴
史的に見ても人々はこの世
はキリストを認めようとし
ない、その真理を認めよう
しない、受け入れようとし
ないという法則のようなも
のがある。そのような闇の
ただなかで全く別のことが
生じた、それが12節から書
いてある。

神の子供

しかし、キリストを受け入
れた人、信じた人―十字架
にかかってあがなってくだ
さった、そして復活をされ
て今 神と同じ形になつて
それをことを信じて受け入
れた人には、どんな人でも
罪の赦しという主の平安を
与えられ、また病気や災害
事件、戦争…等々さまざま

なことで殺されてしまう
ということもあるがどのよう
な死に方であつても信じた
だけで 永遠の命を与えるこ
と―復活をさせていただけ
る、言い換えれば神の愛と
全能の力を信じる人は、神
の子供となる力(✱)を与え
てくださる。

その力を与えられて神様
の子供としていただくこと
が、神によつて新しく生ま
れる、ということである。

イエスを単に歴史上の人物
としてではなくて神と同じ
存在であり、今も働いて居
る聖霊であり、活けるキリ
ストとして働いておられる
のだと、それを信じること
はできたなら、その人は、も
はや古い人ではなく新しい
人である。

信じるだけでそのように新
しい人とされて新しいいろ
んなことが見えてくるので、

次のように記されている。

：だれでもキリストにある
ならば、その人は新しく造
られた者である。

古いものは過ぎ去つた、見
よ、すべてが新しくなつた
のである。(Ⅱコリント5
の17)

(✱) 世は彼を理解しなかつた

この原語は、ギノースコーで
あり、「知る」という一般的な
言葉である。口語訳、新改訳も
「世は彼を知らなかつた」と訳
している。

the world did not know Him
(NKJ)

the world did not recognize
him (NIV)

+ the world did not know him.
(NRS)

(✱) 「力」原語は、エクサー
シアで、「力、権威、権能、資
格」などと訳される言葉。口語

訳では力と訳しているし、英
訳も多くが power (力)と訳し
ている。

・キリストを信じた者は、神の
子となる資格を与えた。(新
共同訳)

「資格」と訳された原語は、エ
クスーシアであり、力(口語
訳、また多くの英訳)、権威、
権能(聖書協会共同訳)、資格
(新共同訳)などと訳される
が、私たちの日常生活で、「権
能」などという言葉をほとん
ど使わない。それゆえ、この
ような訳語になると、

極めて重要な神の子どもにし
ていただけるといふ大いなる
恵みを、何か身近なこととして
受けとりにくいニュアンスとな
る。やはりここは、次頁のカト
リック、プロテスタントの重要
な訳のように、power (力)
と訳するのがだれにでもわかり
やすい訳語となる。

• He gave power to become

(NJB)

• He gave power to become ch
ildren of God, (NRS)

• He gave the right to becom
e children of God-- (NIV)

彼は神の子となる力を与えたのである。(口語訳)、神の子どもとされる特権をお与えになった。(新改訳)

この「資格」と訳されたエクスターシアは、新共同訳でも別の箇所では、次のように力と訳されている。

：父なる神は、私達を闇の力から救い出して、御子の支配下に移して下さった。(コロサイの13)

神の子となる力を与えて下さったと訳されているが、原文では、teknon (子供) の複数形であって、神の子供たち、ということになり、イエスが「神の子」だというのは別の原語である。

イエスは神の子であると信じるのはきわめて重要なことは、ヨハネ福音書の最後に、イエスがこの世に来てくださったのは「イエスは神の子であると信じるためである」と記されているほどである。

それは原語では、ヒュイオスである。神の子 (ヒュイオス ツー セウー)

それゆえ、さきに引用した英語でも、すべて children of God 神の子供たち と訳されている。日本語には複数形がないので、神の子と訳されるとキリストと同じ 神の子だとまちがって受けとってしまう。

イエスが神の子であるというとき、神とイエスはひとつであるという意味で用いられている。

しかし、神の子供とされるということはお父様(神)の言われることがよくわかり、親子が従うように、神(キリスト)に従うという新たな道を備えられることである。

老年の苦しみとめぐみ

年寄ることは孤独、仕事がなくなる、病気が多くなり、死も近づく…等々、好ましいことは何もなくなっ

ていく。次々と失われていくことである。

とくに、病気が重くなると、配偶者の一方がその介護に心身をすり減らし、ともに病気となって倒れるというとき、ときには、介護のあまりの困難に長年つれそつた配偶者を殺害するというような悲劇さえ、折々にみられる。

そのように、老年は夫婦ともに健康で長寿となるという場合とはまったく異なる状況となることも多い。人生の最後の段階で、かつて経験したことのない厳しい試練が日々生じるといふことになっている人たちもある。

聖書においては、老年の重要性についてどのようなことが示されているか、ここでは、その一つを取り上げたい。

イエスの誕生後、初めて幼児のイエスを神殿に連れて行ったときに、長く信仰の歩みをしてきた老人、それと祈りに集中していた84歳にもなる老齢の女預言者が、マリアが連れてきた乳児を見て、ただちに神からの啓示で、その乳児がメシアだと分った。

メシアに出会うという特別な恵みは、長く待ち続け、祈り続けた老齢の人に与えられた。

神からの啓示は、年齢によらないことが示されている。

この宇宙を愛と正義をもって支配し、真実をもって導かれる神を信じたこと、そしてその神が送られたキリストを信じたことは、聖霊によらねばできない。そのような神を目には見えないにもかかわらず、「天のお父様」といって祈ることが

できるのは、聖書に記されているように、聖霊が与えられているからである。

そしてその聖霊をさらに豊かに与えられるためにはどうすればよいのか。それは、絶えず目を覚まして、主を仰ぎ、祈りの生活を続けることである。

ルカ福音書の2章に現れる二人の老人は、そのような人であった。

当時には旧約聖書を研究する律法学者や祭司たちも多かった。しかし、そうした学者や地位ある人たちには、イエスの誕生は知らされず、イエスがメシアとして生れたことも分からなかった。

そのなかで、老齢となつてさらに祈りを深くし、真実に歩んできた人にイエスこそはメシアであると啓示された。

ここに、老齢の意味がある。旧約聖書の続編にも、本当

の長寿とは、霊的なものであり、

「老年の誉れは長寿にあるのではなく、年数によつて測られるものでもない。人の思慮深さ、汚れのない生涯こそ、本当の意味の長寿である」と記されている。

(知恵の書4の8-9)

ヨハネによる福音書を書いたと伝えられてきた使徒ヨハネは、福音書を書くころには高齢となつていて、絶えず繰り返して教えていたのは、「互いに愛し合いなさい」という言葉であったという。それはたしかに、ヨハネによる福音書でも繰り返されている。

愛とは、また祈りである。主イエスは、敵を愛し、迫害するもののために祈れと言われた。

これは、詩編によく見られる並行法である。同じこと、表現を変えて重ねて言うこ

とであり、敵を愛せよと、迫害する者(敵)のために祈れとは、同じことが言われている。

このように、老年の重要な意義は、老いてなお可能である祈りに深くなることである。

老齢となった者にも、重要な仕事がある。それは、祈りであり、祈りによつて神の力を受けつつ、キリストの証しを続けていくことである。

しかし、人によつては、人生の最後の高齢の日々が、病気の苦しみや痛みでさいなまれつつ、しかも一人で耐えていかねばならない状況に置かれる人たちもいる。

そうしたとき、何が、その最後の日々の杖となり、支えとなるだろうか。

それはただ、あの十字架で恐ろしい苦しみや痛みを受けられたキリストを思い、

そのキリストに耐える力を求め、叫び祈ることであるだろう。

ヨブ記には、神を信じうやまつて生きてきたのに、突然の大きな災いで子供も死に、財産も奪われ、重い病気となり、妻からさえも捨てられる人の姿が記されている。彼は、なぜうまれてきたのか、生れてこないほうがよかつたと、激しい叫びをあげる。

このヨブ記の記述は、人間世界にはいかに神を信じていても謎のような、はげしい痛みや苦しみを、また祈りが聞かれないと思える長い苦しみが続くことがあるのを示している。

それでもなお、残されているのは、神に向つて叫ぶほどの祈りだった。

そうして長いときがすぎたときようやく神からの語りかけがあり、最終的にヨブ

は救われ、みずからの傲慢、罪を深く知らされたのだった。

そのような恐ろしいばかりの苦しみでなくとも、病氣、入院、配偶者の病氣やその介護、その死などのとき、ようやく、自分がいかに多くのことを感謝せずして受けてきたかに気付かされていく。

夫や妻の日々のはたらきの一つ一つにどれほど互いに感謝してきただろうか。また事故や災害、国難にあつて家すらなく、食物さえなく、国からさえ脱出せねばならないひとたちのいるなかで、家も食事も、また国から逃げていくこともない— そのような状況に本当に感謝してきただろうか。

朝起きて、指が動く、手足も動く、目で見ることもできる、食べ物も与えられている、一つ一つが与えられて

ていることに気付かされるのも、老齢になって病氣となったときにいつそう思い知らされる。

長い人生—それはまた、感謝して受けとるべきたくさんのものをあまりにも忘れて当然のこのようにうけとってきた歩みでもあったことを知らされる。

身近な者が、記憶するといふ基本的な機能をも失つていくのに接して、その記憶できる、ということに感謝したことがなかったことに気付かされた。

忘れるというのでなく、そもそも記憶できないのであるが、そうになると、以前には、思いもよらないさまざまの問題が生じてくる。文字もわからなくなり、言葉も次第にうしなつていく。

そこから、文字が読める、文が理解できる、また話すことができる、—そうした

一つ一つのこと、また食べるとき歯で噛める、それがちゃんと胃に流れていく、といった基本的なことも一つ一つ感謝すべきことであつたのに気付かされる。

大空の美しさ、雨風についてもそこにも深い霊的な意味がかくされていること、草木の一つ一つも、秋の虫たちの声のひとつひとつ：なにをみても、そこに何かを与えようとする神のお心がある。それにも感謝をどれほどしてきただろうか。そうした一つ一つに気付かされていき、苦しいながらも生活のさまざまのところ、感謝できるようになることがまた老年の恵みである。

石の心から肉の心へ
—真理に反応しない心と生きて反応する心

私たちは、おそらくだれでも、新しい心になれば、という思いを持っているであろう。

あと一カ月余りでなされる一連の行事、除夜の鐘、初日の出を拝む、お正月の初詣などに現在でも多くの人が関心を持つのも、こうしたことで、悩みや心の汚れなどから離れて、新たな心を—と願う心あるからであろう。

新学期、入社、入学：等々もみな、そうした新しい心、生き生きした心や力を求めている表れである。

—このような、新たな生きた心—本当の神を真実な心で求める心を、聖書では、最初から一貫して語り続けている希有の書である。

聖書巻頭の一言、闇と空虚、荒廃のただなかに、響きわたった「光あれ！」との言葉も、闇と空しさのなかに

閉じ込められる人間の魂の世界に、神がその愛ゆえにくださった霊的な光が象徴的に言われており、その光を受けたときには、その生きた心に転換されるというメッセージがこめられている。(創世記1の1〜3)

また、創世記の二章にも、砂漠地帯の渇ききつたところに、泉が湧きあふれているという記述があり、これも人間の魂のいつもかわらない本質―それは真実や愛に渇ききつているその状況のただなかに生きた水があふれ、流れているという描写である。

これも、そのような渇いてみな死んだ状態にあったところにあふれだす水が与えられることこそが、生きた新しい心だと示すものとなっている。(創世記2の5〜6)

ここでは、あまり知られて

いない旧約聖書のひとつの書の中の言葉からのメッセージの一端に耳を傾けたい。

それは、今から二千六百年近く昔に記された預言書といわれるもののひとつである。

そこでは、この生きた心を「肉の心」と表している。「石の心」と対比してのことである。

：私が、あなた方の上に清い水を降りかけると、あなた方は清められる。

そして、私は、新しい心を与え、新しい霊を置く。

あなた方の中から石の心を取り除き、肉の心を与える。(エゼキエル書36の25〜26より)

こういう単純な言葉の中にこの世の考え方と全く違ったことがあるし、私たちが何を求めるべきかということも示されてきている。

も示されてきている。

私たちの心が清められるためにどうしたらいいか、一般的に言ったら おそらく多くの人はここに記されているような神からの清い水、新しい霊など、こんなことは思いもよらないであろう。私自身も、聖書の世界を知るまで、キリスト教信仰が与えられるまで、まったく考えたことも、読んだことも、話したこともなかった。

人間の決意では出来なくて、そしてこの古代においては科学技術が自然を破壊したりもしないから、清い自然というものもたくさん見られるが、自然に触れると私たちは、何らの形で清められる。それは誰しもある。

それは神様が創った直接的なものでも人間的な意図が入らないからである。これは、信仰を持つ持たないに関係がない。

どんな人でも、大きな海の

前の綺麗な浜で白い波が神秘的な力強い音をたてて打ち寄せる景観や、あるいは(徳島市近傍に住む人なら)

四国一の大河である吉野川の堤防から降りて、川辺に立つて静かに流れる時に吉野川の西側に日が沈んでいく、それはしばし見とれるような雄大な光景である。

特に秋分の時に、吉野川は西から東へと80キロぐらいもほぼ東に向って流れているので、その川に美しい夕日が沈んでいくと広い川面にその赤い日が映え、非常に美しい光景で、そういうのに接すると誰しも何か清められる。

それは私たちは身近なところで神様はいつもそういう清めを受けるように、広大な自然、それを創ったこのような清いものを創った神様の清いものを受け取りなさいと、そういうことがあ

ると思われる。

山の世界との出会い

私は、大学に入学して、徳島での高校生活とまった

く異なっていて、当時のベトナム戦争や、安保問題などに激しい情熱をもってそうした政府のやりかたに抗議し、学内のさまざまな場所、講義前の教室なども頻繁に用いられて、そのためのピラなども毎日たくさんまかれていたことで、そのような日本や世界の政治、社会的問題にも初めて目を開かれていった。

しかし、それらのこの世の様々な問題と自分自身も罪の問題や健康の問題、暗い家庭の問題：等々に心の世界はどこに道を見いだしたらいのかまったくわからなくなっていた。そうして悩み苦しみはますますつのって、ある晩秋の夕刻近

い時刻、下宿でじつとしていられなくなり、京都市北部の大原、三千院方向に向って自転車であてもなく走り続けていった。

そして大原付近で、とある山の指導標があり、そこから登り始めて、その山の世に引き込まれて冬の近い頃、かつ夕刻であったためか、途中誰にも会わず、頂上まで登ったのが、天が岳という山だった。京都市三条大橋からも北方見れば正面にみえる山である。地味な山であるにもかかわらず、そこで私は山の雄大さ、奥深さ、清さなどに初めて開眼され、それ以後、京都から、日本海まで広がる広大な京都北山、丹波高原、さらに、琵琶湖岸にそびえる比良山系一帯を繰り返し訪れるきっかけとなり、それ以後、キリスト者となって徳島に帰ってから、四国

の山々―剣山、三嶺、石槌山系から、自宅の前方に山なみをみせる四国山系などの縦走等々、その山の良さを生徒たちにも知らせたく、単独で引率して山に登ることとたびたびあり：さらに、北海道の瀬棚聖書集会のあと、各地の集会を訪れる途中で車でもかなりの高さまで登れる山、時間的に可能な山などに登ったりして現在に至っている。

哲学、社会問題からキリスト教へ

自分の家庭の暗かった雰囲気ですら、大学に入学し、当時は学生たちの社会や政治についての関心が非常に大きくて、そのような国や世界の前途にかかわる問題に関して、デモや集会など、印刷物の配布など実に積極的にかかわっていた。内外共に騒然としていた。現在では

考えられないほどである。

今は多くの学生たちは彼ら同士の遊び、交流、イベント、スポーツ等々に力を入れていて。それらに関することは、時間もエネルギーもかけてやるけれども、原発や安保問題、嘘の横行する政治の世界、また、世界の現状―内乱、戦争などのため、飢えや貧困に苦しむ人々への関心も少なく、そうした問題には概して不思議なほど無関心であり、日本の国や、最も近い韓国や北朝鮮、中国といった国々との関係がどうあるべきか、過去のそれらの国々との関係の歴史を踏まえて、日本とアジア、また世界の前途がどうあるべきなのか、そうした広い視野からの学生たちの意見や議論、集会など、ほとんど耳にしない。

私自身は、山に登り、歩く

ことによつて、この世の悪の力、汚れから逃れて清められる思いを与えられてきたが、そうした清めを受けなくても現実の世界に戻ると次々に問題が生じて、そして新たな様々な悩み、苦しみがあつた、その度によく山に行つたりしていが、山だけでは、到底解決されなかつた。

その後、ギリシャの哲学の世界に初めて触れ、それからさらに1年後にキリスト教信仰が与えられ、キリストの十字架による罪の赦しを信じて平安を与えられるという人生の決定的な方向転換が与えられた。

そのキリスト教によつて、聖書に記されている真理によつて、現代の私たちが今も清い水を与えられ、新たな心とされる永遠的な道があることを知らされた。

ただ、幼な子のような心も

て、神様の愛と全能を信じ、神がこの地上にかつての私のような迷える羊を救いだすために、イエスを世界に送り出されて、万人の罪を担つて死んでくださったと信じて、その罪の赦しの象徴である十字架を仰ぐときに、霊的な清い水が注がれるのを体験してきた。同時に、何人からも与えられない、魂の平安への道もここにあることを知らされた。

讃美歌にもそのような賛美があり、戦前から愛唱されてきた。

：十字架の血に 清めぬれば
来よ」との御声を われは聞けり

主よ われは 今ぞ行く
十字架の血にて清め給え

(讃美歌515)

キリストの十字架を信じる

とそのイエス様の聖なる霊、

命が私たちに注がれる。そういうことで、私たちが清め、清めは神様から、今日ではキリストから来る。そうして初めてそうしたけがれ、偶像からの清め、赦しと清めを受ける。そしてヨハネ福音書ではよく引用される「私を信じるものの内には泉がわきあふれる。」(ヨハネ4の14、同7の38)という箇所もよく知られている。

：わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。

その命の水が湧きあふれる、その水とは聖霊だというふうにヨハネ福音書では記されている。

新しい心が与えられる道―それは、例えば優れた人の

講演で新しい世界が開かれていく、音楽とか思想とか、学問の世界の人とか、或いはスポーツの世界にしてもだれかのその道を深く究めた人の話しを聞くことで新しい心が与えられ、道が開かれることもある。

よき書物、音楽、美術作品いろいろなものも私たちに新しい心を与えてくれるであろう。しかし、私の経験では、日本の文学、漱石、鴎外、島崎藤村、なども中学、高校、大学にかけてと読んできたけれども、一時的にこんな考え方があつたと思つても、その根底に、宇宙のすべてを創造された全能の神を信じる信仰がないゆえに、その新しい心というものもごく表面的、一時的なものにすぎず、迷い悩める心はまったく変えられないことにはなかつた。

ところがこの聖書、神の言

葉に触れてからは、21歳の5月の下旬に初めて知ってから今日に至るまで50年以上にわたって、ずっと一貫して変わらない。

これは山の世界ですらもそのような永続した一貫したものを与えられることは難しかった。そもそも山の世界は健康でなければそこに直接行けない。しかし、神のところには、祈りによって、病気となっても、しばしば更に深く神のお心に近づけるということが与えられる。

このことを、イエスも強調している。

ユダヤ人の重要な宗教的な祭りのひとつが最も盛大な最も終わりの日に立ち上がった、大声で言ったと記されていることがある。とくに非常に強調して記されている。イエスは、静かに語られるというイメージが強いが、ここでは、イエスが立

ち上がって、しかも大声で言ったと記されている。

：祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲め。

わたしを信じるものは、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となつて流れ出るようになる。(ヨハネ7の37〜38)

現在では、マイク、スピーカーがあるからたくさんの人を前にするときでも大きな声で叫ぶやいうことは全く必要がなくなった。しかし、以前は、電気が使えるようになるまでは、何万年となく続いてきた人類は、何かを遠くの人、たくさんの人たちに伝えるには、大声を張り上げなければなら

ない。

ところがこのイエスの大声には象徴的な意味があつて、まさにこれは世紀を通じて、世紀を超え、地域を超えて、時間を超え、空間を超えて伝わる。そういう霊的な大声だった。

それから二千年間、今日に至るまでも、また今も世界には、霊的な大声で、「乾いているものは誰でも私のもとに来たれ」という呼び掛けがなされ続けてきた。

しかも、ただ信じるだけで、いのちの水が、生きた水が、川の水が流れるように生じるのだと。それまではあなたたは死んでいるようなものだけだー「かつてはあなた方は罪のために死んでいた」と記されているほどである。

(エペソ書2の1、5)

心がまったく渴ききつていて、枯れていたような状態。そこに不思議なことにいの

ちの水が流れ出ると言われるほどに変えられる。たしかに、この二千年前のイエスの言葉は、その後無数の人々によって体験されてきた。キリストを真に信じてその福音を信じた人からは、本当に「いのちの水」というべきものが流れ出す。

私も様々なことがあつても50年を超えて、このイエス様と触れて、み言葉に触れた時から心の深いところで、小さくともいのちの水が湧いてくるということが続いってきた。そして更に私から流れ出て少数ではあつても、私以外の人たちにも、このことが与えられてきた。

大学4年の5月末に、一冊の本の立ち読みで信仰が与えられて、ちょうど1年後に最初に教員として赴任した高校で「希望の方は、聖書や人間の生き方に関する本の読書会をしますから希

望の者は放課後に私のいる理科室に来てください」と、読書会開設のことを話した。早速に十数人の生徒が集まり、4年間その高校で勤務したが、それから50年を経た今日でもその最初の高校で聖書を知って、信仰を続けている人たちは、5人の方たちが県外を含めるとおられる。

私は、信仰を与えられてからちょうど一年しか経たず、当時私は、大学の理学部4年であって聖書関係の勉強などするなどほとんどなかった。それでも信仰は伝わった。それでも信仰は伝わった。それはまさに神のなされた働きだったと実感している。

イエスは聖霊について言われた。その聖霊とはまた、いのちの水であり、イエス様から与えられる水であると記され、さらに、聖なる風でもあり、どこからか吹

いて来て、求める者に力を与えていく。

今日、引用したエゼキエルの書の箇所では、特に清めということで、新しい心と新しい霊、それを言い換えて「石の心を取り除いて、肉の心を与える」とある。

重要なことは、強調するために、似た表現でさらに言い換える。そして「新しい心や新しい霊」を「肉の心」と言い換えている。

偶像しか知らない石のような心でも、信じるだけで、生きた心、肉の心を神様は与えてくださる。

キリスト教を信じて、或いは聖書を読んできた人でも、エゼキエル書も読んだことがないという人も相当数いるであろう。心を込めて読んだ、通読はしたから、石の心という意味は解るであろうが、「肉の心」という表現は、これだけとしたら

おそらく一般の人々にとっては、よくわからない表現だと言えよう。

これを「生きた心」と言い換え、新しい心、新しい霊とも言っている。次々と似た表現をたたみ掛けるように強調して浮かび上がらせる。

そのことを知って読むと、「肉の心とは、神様が清い水を注がれたその心であり、新しい心であり、根本的に新しい霊のことなのだ」とわかる。

生きて反応する心 (＊)

(responsive heart)

肉の心―神から与えられる生きた心とは、神のご意志にかなう、優しく、生きた反応をする心と言えよう。

神が創造された自然のさまざまな日々の日常的な現象、そして、人間世界の日々起きている災害、事件、政治、社

会的なできごと…：そうしたことに敏感に反応する心である。

(＊)このことに関しては、次の英訳がわかりやすいと思われる。

I will take out your stony, stubborn heart and give you a tender, responsive heart. (レスポンシブ ハート) responsive heart とは、応答、反応する心。

すでに、数千年昔の旧約聖書の預言者たちは、深いまなざしで、人々の魂の墮落とその結果の裁きを見つめ、全身全霊をあげて反応していたのがうかがえる。

：あなたたちが聞かなければ、わたしの魂は隠れた所であなた方の傲慢に泣く。涙が溢れ、わたしの目は涙を流す。主の群れなる人々が捕らえられて行くからだ。

・「わたしの目は夜も昼も涙を流し、とどまることがない。

娘なるわが民は破滅し、その傷はあまりにも重いからだ。(エレミヤ書 13の17、14の17より)

今日のエゼキエル書の箇所では、直接的には「石の心」というのは偶像崇拜をする心であり、本当の神様の心を解ろうとしない、自分の罪のことも解らない。形式的な宗教に固まってしまっているということである。それは現代の私たちにとっても、あてはまる。人間の作ったものを、神として崇めることからは何もよいこととはうまれない。狐や蛇や大木、神話上の人間、あるいは残虐なことをして多数の民を殺害などした豊臣秀吉や信長などを神として崇めることから、神という

ものはそんな人間と同じような性質なのだと思います。ない。

古事記にみられるスサノオノミコトの乱行を読めば、それを神として拝むなら、そうした悪行を肯定することになってしまう。

また靖国神社では、戦争で他国の罪なき人たちの命を奪い、しばしば非人間的な行動をした軍人たち、あるいは、あの無謀な戦争を推進して中国など東南アジア諸国の人々や日本人も含め、一千万を超える人たちを死にいたらせるようなことになったその戦争の責任者さえも神として祀られている。そのような悪行をかさねた人を一律に神として拝むことは、そのような悪事をも正しいとすることにつながる。それは、固くなった石の心というべきものである。それに対して、原語に直訳

だと「肉の心」が置かれている。けれども、この表現では、現代の私たちには意味不明で、違和感があるだけではないかと思われる。

肉の心とは、石という命のない存在に対して、血の通っている肉体、その生きた体にあるべき生きた心、といった意味で使われている。

そのような心の重要性は、いろいろなところで見られる。誰か人と対する時でも、また「祈りの友」の祈りの課題集に短く書いてあるが、その人々の短い記述の中にどれだけ日々の悩みや、痛みや苦しみや忍耐などさまざまなことが、凝縮されているかということを思うとき、私たちに石の心でなく、肉の心があるほど、そこから伝わってくる実態を受け止めることができることになる。

関しても、空を見ても、一枚の葉を見ても、さまざまの昆虫を見てもどのよう私たちが神様と結び付けて、神様は全部を取り仕切つてなさているのだから、この例えば気持ち悪いような昆虫、或いはきれいな昆虫、蝶とか、それぞれに意味を持たせてある。

自然というのはそれらを含めて自然なのだから、自然を愛するといえ、たいがいは普通、美しいものだけを自然を愛するというのに使うが、自然というのはにも人間だけが美しいと思うのではなくて、自然は怖いものや、醜いもの、気持ちが悪い様なものみんな含めて自然なので、それを愛するというのは、ちよつと気持ちが悪いようなものも、神様は背後でどのような意味を持って創られているのか、今の私にとってど

のような意味があるのか、と神のご意志、御計画に思いを馳せつつ、見つめることが肉の心だと言えよう。

それに対して、「この虫は悪い、嫌いだ」ということに終わるなら、それはその虫に対して、「石の心」をもつて対応したということになる。

花が好きといっても園芸の草花しか関心がなくて、道端に生えているような雑草といわれるもの―最近はずいぶん雑草というイメージになるので、それより、野生で咲いている草ということが野草というほうがイメージがよいので、その野草の花でも、その小さく地味な花一つを見ても、また小鳥の鳴くことやセミの鳴き声にしても、また、嫌な虫、動物の類に関しては、昨日の夜には10時ごろには、私がパソコンのマイクに向かって話

していますこの部屋の南側の窓の直ぐ下に石の大きな石、縁石があり、そこに1匹のマムシがとぐろを巻いていて、近寄ろうとしていた私に噛みつきこうと待ち構えているのに出会った。懐中電灯をもつてなかったら、噛まれていた可能性が高かった。

それらの存在のひとつの意味は、神様は、私たちに警告の意味を持ってそういう風なものを存在させているということである。聖書にもペテロの手紙にも「サタンはライオンのように吠え猛つて、私たちを飲みつくそうと構えておる」と。そういう毒虫や蛇に会う度に、やはり神様は警告を与えてくださっていると感じる。懐中電灯を持っていなかったら、傍を通ったらじつと待って、パッと飛びつかれ

て咬まれていた可能性が高い。私たちも神様の光がなかったらサタンに噛みつかれる。そういう身近な生きた問題になる。

聖書に対してもうっかりすると私たちは、石の心になって、ある人が「私は、聖書のことは読んだからわかっている」と言ったのに驚いたことがある。表面的に読んだらわかった気持ちになる。石の心になる。集会に参加していないと、聖書の深い意味について知らないままとなり、聖書をさーっと読んでしまふ。

このように、石の心でなく、生きた心、絶えず生きて反応する心、この一言でもさまざまな意味がある。いろんな人、日本全体も長い歴史を見たら本当に固い石の心が宿っておって、だから本当に生きた神の心を大

多数の人々が拒んでいると言えよう。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、医者とともに、看護師の働きがクローズアップされ、頻繁にコロナ対策にかかわる医療従事者の激務のことが報道されてきたが、そもそもその看護師という職業は、日本においてどのようなことからはじまったのかということ、ほとんど全くテレビや新聞でも報道されない。

そのため、ここで、少し日本の看護師、その教育の歴史をふりかえってみよう。

日本における看護師教育

日本において看護師を養成する学校の最初のものは、一八八四年(明治17年)に現在の慈恵医科大学(*)のものとなった病院長が、イギリスの医学校に留学し、そこで学んだ、ナイチンゲール

ルの看護師養成学校を模範として作ったものであった。その後まもなく、新島襄の医学学校設立の目的もあり、アメリカ人宣教医ジョン・ベリーや、同じくアメリカの宣教師リンダ・リチャーズ、そしてアメリカの教会から日本に派遣されたアビー・マリア・コルビー女史などによって、京都の同志社に看病婦学校が作られた。さらに、東京ではアメリカの宣教師、メアリ・ツルー女史が、桜井女学校(**)に看護学校を設立した。

その後、一九二一年に、東京の聖路加(せいるか)病院(***)で、当時の女学校を卒業した女子を入学させ、三年間教育する高等看護婦学校が作られて、その後日本で最初の看護教育の専門学校¹の認定を受けた。

(「ナイチンゲール」伝記の日野原重明による解説な

どによる)

このように、イギリスやアメリカのキリスト教精神が、日本の看護教育の歴史の最初において、きわめて重要な役割を果たしているのがわかる。

(*) 慈恵医科大学の名称にある「慈恵」―慈しみと恵みは、当時のイギリスにおいて広く浸透していたキリスト教でも重要な、神の愛と罪の赦しの恵みを反映したものとなっている。

(**) この桜井女学校は、やはりキリスト教の宣教を目的とした、東京のミッションスクール、新栄女学校と合併して現在の女子学院となった。後に、この女子学院の高等科(現在の大学にあたる)は、東京女子大学に統合された。この女子学院の初代院長となつたのが矢島楯子(かじこ)。その後、1927年から1955年に召されるまでの19年間、女子学院長をつとめたのが、三谷民子。この民子は、無教会のキリスト者として知られる三谷隆正の異母姉。

なお、女子学院は現在では、

東京大学に毎年30人ほども合格するとして有名であるが、現在も一日を讚美歌³⁰¹番の「山辺に」のチャイムから始る毎朝の礼拝(黙祷、讚美歌、聖書の話)がなされている。

(***) 聖路加病院の名称となっている「路加」、これは、ルカ福音書の著者であり医者でもあったルカの中国語訳であり、当て字ではない。中国語では「Lu Jia(ルーチャー)」と読む

目を覚ましていないと

すでにキリスト教信仰を与えられている私たちにおいても、霊的に目覚めていないと、再び石の心に戻ってしまう危険性をつねにはらんでいる。例えばペテロのように聖霊を豊かに注がれてもなお油断していたら割礼をしていない人たちと食事をしなくなつた。割礼をしていない者は汚れているという誤った信仰に引つ張り込まれたからであった。それを知ったパウロから面と向かつて叱責された。

：ところが、ケパ(ペテロ)がアンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあったので、わたしパウロは面とむかつて彼を非難した。というのは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしていたのに、彼らがきてからは、割礼の者どもを恐れ、しだいに身を引いて離れて行ったからである。(ガラテヤ書2の11〜12)

ペテロの様に豊かに注がれた人であっても油断したら割礼をしていない人と食事をしたら汚れるという、「石の心」に戻ってしまった。

「割礼を受けていないから、汚れているなどと思つてはいけない」このことは、ペテロにとって、夢にまで出てきて、神からの命令としてありありと見た。それ

にもかかわらず、ユダヤ人の古い宗教的言い伝えに引き込まれたのだった。

それにもかかわらず、石の心になってしまった。これを見抜いたパウロは面と向かってペテロを叱責した。真理からの明白の離反に接したときには、そういう風に面と向かって相手を叱責しなければいけないと知らされる。批判というのも神様の真理と、正義、真実のために、福音のために言わなければならないということがある。

私たちは、日々の生活において、たえず、周囲のできごとに関して生きた反応、リスポンシブな反応をしているのか、それとも、石の心なのか問われている。例えば、知り合いの人が、或いはキリスト者の友人が病気になるとか召されたとき

いうことに接したとき、その病気の人には、何が最も必要としているだろうか、あるいは召された人には、何をこの世に残しただろうか、私たちが受け継ぐべきものは何なのか：等等と、生きた心で反応するの

か、それとも、そのうち治るだろうと祈りも見舞いもなく過ごすのか、また死に際しても、ああ、死んだのかと、ただそれだけで何も思わないか、或いはその家族の人たちが40年、50年、60年と長い夫婦の生活があったから、深い喪失感の中にあるだろうか。

私たちの心のあるべき道は、いくらかでも別れ道、選択すべき道がある。その人を知っていれば知っているほど、その喪失感の中に神の聖なる霊がそこに注がれるようにと、どれだ

け本気で祈ろうとするだろうか、そういう風に私たちも生活に一つ一つは、新しい霊、新しい心をたえず受けているのかどうか問われることになる。

清い水、神からの風

聖書の言葉、聖書そのものがそういう風に、私たちがみ言葉にいつも生きた心、リスポンシブな心、であるようにと、そのように語りかけてくる。清い水を与えられるほどに、私たちの心はいろんなことに、美しいこと、良いことに、闇のことも耐えず反応して、闇のことであればそこに神の御国が来るように祈りを促される。

この清い水のこと、37章では聖霊の風という形で出てくる。

37章は徹底して枯れてしまっ

たものが神様の息、風、5節には「お前たちの中に、死んだ徹底して枯れた骨の中に霊(ルーアハ)、風を吹き込むと訳している。神が息を吹き込む、そして生き返る。

その後9節も「霊よ、中央から吹き来たれ。」。霊よ、吹いてこい、これは勿論、原語のヘブル語では、ルーアハですが風と訳している英訳も当然あります。

「その風よ、ルーアハよ、吹き来たれ、風よ、聖なる神の風よ、これらの死んだ者に吹き付けよ、そうすれば生き返る。」

今日の箇所では、「清い水を注ぐ」とありますが、すぐ後の37章では、聖なる風、神様から吹く風、神の息、風としての聖霊というように、命を与える風(神の息)という側面からも書かれて

いる。

聖書でも様々な表現―生きた反応をする魂になるようにいろいろな表現を通して神様が迫ってきて下さる。

私たちは、聖書の無限の奥深い世界に接して絶えず新しい霊を受け取っていきたい。絶えず固まろうとする石の心を取り除いていただきたいというのを願いつつ、それが御国を来たらしたまえ、ということでもある。(2021.9.14の徳島県海陽町海陽集会での講話に加筆)

「祈りの友 合同集会」に参加して

M・N (静岡)

多くの刺激を受けました。感謝です。

以前、徳島で開催された全国集会あるいは四国集会で

あったか、一日目の夜、

「祈りの友」の集いがあり、大きな輪を作り、示された人が順番に祈ることがありました。

あの時の印象が強く心に残っています。困難に直面している兄弟姉妹のために具体的に祈ることの大切さを示されました。

そして昨日の「祈りの友」合同集会に参加しておられた福井県のN姉 O姉の夫の介護、YN姉の高齢独居者宅訪問・交わり等の話を伺い、もつともつと祈らなければならぬ気持ちを持ちました。

その一方において、鹿児島のF兄の病院や施設訪問し、小さな人たちと交わりを持ち、祈りの友の方々の順に祈られる献身的な愛の姿、以前から知っていましたが昨日改めて参加者か

ら感謝の言葉をお聞きし、

本当に頭が下がりました。

また、京都のK兄、大阪のS兄、福岡のK兄、青森のT兄等とも繋がりを持って、祈りの友の奥行きの高さを感じました。最近伝道会に入会されたM兄も参加され、K兄(茨木)、H兄(神奈川)(私はこのお二人と面識有りません)も参加され、祈りの友との繋がりの大切さを改めて認識した次第です。

今後、もつと「祈りの友」の存在が知られ、新しい兄弟姉妹が増え、と思いつつ。今後、周りの人を誘ってみようと思います。

○ナイチンゲールが語ったエピソード。

「ある非常に有名な優れた医師が、肺炎をどう治療するかと尋ねられたとき、

「私は肺炎を治療しません。

私は肺炎にかかっている人を治療するのです。」と答えたという。

それにもかかわらず病気でなく、病人を看護するということとは、看護そのものと医師との違いのひとつなのである。」(「ナイチンゲールの看護論」58頁)

ここで引用している優れた医師は、病人に向うとき、その体の病気を癒すだけでなく、全体としての人間を癒そうとしてきたのがうかがえる。そしてナイチンゲールは、医師は、病気をなおそうするが、看護は、病人を癒そうとすることなのだ。

キリストは、ナイチンゲールの引用した優れた医師の方針を完全な形で実現してきたのであり、病気そのものをも癒すことができ、さ

らに魂の病、人間全体がかかっている自分中心という病を癒すために来られたのだった。

報告

第9回「祈りの友」合同集会

二〇二一年九月二十三日 (秋分の日) 11時から16時
オンライン集会

参加者56名

プログラム

開会礼拝 司会 貝出久美子

賛美①「天の神祈ります」

讃美歌21の³⁵⁴

1、開会 吉村孝雄 祈りの友の祈り 「真珠の歌」より

2、祈りに関する聖書講話

①「父の約束された聖霊

が来るまで熱心に祈って待っていた」 西澤正文(清水聖書集会代表) ②「レアとラケルに対する 神の愛

創世記より」 小館知子

(春風学寮母) ③「主イエスの御名によって」 秀村

弦一郎(福岡聖書研究会代表)

賛美②「ちいさなこに」

讃美歌第2編²⁶³

3、12時〜12時40分 休憩昼食

4、自己紹介・近況報告

5、祈りに関する証、感話

土屋聡

①「罪の赦しの十字架」

浅井慎也(東京) ②「祈られ、助 けられ」 富永尚

(松山市) ③「どんな時にも神に信頼せよ」 田嶋恵

子(仙台) ④那須佳子(大阪府高槻市) 「祈りつつの

歩み」 ⑤「信仰と祈りの友への導き」 栗栖陽子(島根)、

⑥「祈りに応えてくださる神さま」 綱野悦子(徳島市、

全盲)、 ⑦「祈りの友の祝福」 対馬秀夫(青森)、 ⑧

「中途失聴者の困難の中の恵み」 奥住芙美子(徳島市、

聴覚障がい者)、 ⑨清水勝「日毎の糧を」(大阪市)

6、午後三時の祈り

司会 古川 静(鹿

児島) 賛美③「祈りの友の歌」 参加者による祈り

7、閉会集会 司会 香西 信(京都) 感想(1人5分以内) 大塚正子(北海道)、

峰原 順子(茨城)、 鎌田厚志(福岡) 祈り(司会者) 賛美④「神共にいまして」

新聖歌 508

「北海道から九州までの各地の「祈りの友」が、インターネットのスカイプという手段によって集められ、ともに祈り、御言葉により祈りを学び、さまざまの方々の証言を聞く恵みのおかげが与えられて感謝。

なお、この「祈りの友合同集会」の内容の全録音CDの希望者は、左記の吉村まで申してください。価格は送料共 1枚五〇〇円。

さらに、祈りに関する聖書講話、証しなどは、「祈りの友」会報の二〇二一年度「祈りの風」に掲載されています。

「祈りの風」は、53頁、B5版。この送付を希望される方も、同様に左記の吉村まで。送料ともで、二〇〇円。

集会だより(8月分)

以前には、別刷で作成していた「集会だより」を、ここに掲載しておきます。家庭集会是、天宝宝集會(綱野悦子宅)と小羊集會(鈴木益美宅)。この二つはいずれも全盲の方の治療院が会場。

ほかに、板野郡の北島集

同集会」の内容の全録音C

会場。

ほかに、板野郡の北島集

会(戸川宅) 海部郡の海陽集会(数度宅)があります。

○8月1日(日) 主日礼拝
「神の国のために共に働く」
コロサイ四・9〜11

会場11名 スカイプ49名

「神の国のために共に働く」とある。ともに働く、ということとは人間社会の中ではよくあることである。しかし、からだを使つて働くことは、病気や障がいが重くなることと難しい。しかし、神の国のためには、どのような状態でもはたらくことができる。それは一番大事な仕事、祈りである。集中して祈るとき、不思議な道が開かれる。

叫ぶような真剣な祈りを神は聞かれる。さまざまに困難も祈るために与えられている。祈りは離れていても、会ったことがなくても

聞かれる。聖霊が注がれるようにと祈る。病もみこころならば癒され力も与えられる。そのような祈りをもって、それぞれが悪の力が個々の人から、また人々の集まりであるさまざまの会社、学校、お店、役所：から除かれて良き力が臨みますようにと祈ることはともに御国のために働くことになる。病気だから働けないのではない。自分の心のこと、集会の人、災害にあつた人、難民という苦しい状態の人、そのような人でも福音のためには祈りという働きが与えられている。

○8月2日(月) 小羊集
会 鈴木治療院にて(オンラインと併用)

「見ることの大切さ」ヨハネ一・40〜46

ヨハネ福音書では、特に

「見る」ということが繰り返して書かれている。この個所にも「見る」、「出会う」「みつめる」といった言葉が何度も記されている。肉眼で「見る」ということは一般の動物にも見られる。しかし、人間は心で見るとさらに聖霊によつて見るということが与えられている。心の中を見る。目に見えないものを見る。愛情があるかどうか、それは目を見たらわかる場合もある。

そのまなざしを完全にもつているのが神である。神のまなざしは、すべてを見通される。「見る」ということに、力を神は与えている。そして、この神のまなざしがわたしたちに注がれている。

：彼は、まず自分の兄弟シモンに会つて、わたしたち

はメシア(救い主)に出会つた」と言った。そして、シモンをイエスのところに連れて行つた。イエスは彼を見つめてケファと呼ぶことにする」と言われた。(ヨハネ)

「ケファ」とは「岩」である。本当の岩は神であり、キリストである。詩編では神はわが岩、という表現がある。それをイエスが受け継ぎ、イエスは岩であり変わることはない。

ナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。

イエスの所にきてみたら、世界の見方がかわり価値観がかわる。

○8月8日(日) 主日礼拝
「祈りにおける戦い」

コロサイ書四・12〜18 会場
11名 スカイプ44名

人間は三つの戦いがある。自然との戦い、人間同士の戦い、心の中の戦いがある。目に見えない戦いは、地位や権力、お金があってもそれは関係がない。神を知るとき、心の中で戦いが起こる。安易な道を選ぶのか、難しい道を選ぶのか。

命がけで福音を日本に伝えてくれた。それらの人は、祈りの戦いによって苦しみながら戦ってきた。それらの人は世に知られていなくても神に名前を知られている。人に知られない、褒められたいと思うとき、それはすでに戦いに負けているといえる。神はすべてご存じである。

安心、安全だけを求めると、福音は伝わらない。命がけで、働いてくれた人によって福音は伝わってきたのである。

「神の御心をすべて確信しているようにと、いつもあなたがたのために熱心に祈っています」とある。この「熱心に」と訳さ

れている原語は「アゴーニジマイン」で、「戦う」という意味であり、苦闘する、格闘するといふ意味がある。英訳では、battle、wrestle 等も用いられている。

「つねに、あなた方のために、祈りのうちに、炎のような情熱をもって働いている」

「彼はあなたがたのために、祈りつつ、決して戦うことをやめない」

「彼は祈りの中であなたがたのために格闘している」

・ He is always wrestling in his prayers (MRS)

のようにも訳されている。わたしたちは祈りにおいて戦いが必要であることを常にみつめる必要がある。

終戦を記念する8月。過去の歴史を正しく知り、日本の犯した罪を学び、正しく考えることができるようにすべきである。

先人の悲痛な苦労を思い、日本に神の国が来るようにと祈るものでありたい。そして、今の生活の中で何をするにしても、神の国のために行うものであり

たい。

○8月13日(金) 天寶堂集會

(はり治療院、網野悦子宅にて)

「キリストが再び来られること」

マルコ十四・62〜65

「人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」キリストが再び来て下さる。この日は「主の日」として預言されている。

この地球も太陽でさえも、最終的には消える。この世界のすべてが最終的にどうなるのか。その解決がキリストの再臨にある。ヨエル書には以下のように記されている。

「その前に、地はおののき、天は震える。太陽も月も暗くなり、星も光を失う。主はその軍勢の前で声をとどろかされる。その陣営は甚だ大きく御言葉を実現される方は力強い。主の日は大いなる日で、甚だ恐ろしい。誰がその日に耐ええよう。」(ヨエル二・10〜11)

このような恐るべきことが示されている。しかしそれは、以下のように続く。

「あなたたちの神、主に立ち帰れ。主は恵みに満ち、憐れみ深く忍耐強く、慈しみに富みくださった災いを悔いられるからだ。」(ヨエル二・12)

自分の犯した罪の重さを知って、方向転換をする。そのとき神は救いの手を伸べられる。世界に途方もない変革が起こっても、キリストの言葉は永遠に変わることはない。神に立ち返るとき、神は罪を赦してください。

「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは奴隷となつている男女にもわが霊を注ぐ。」(ヨエル三・1〜2)

キリストはどんな大混乱があつても、そのただ中に来られて、新しい天と地を下される。

そして、わたしたちの姿はキリストの栄光の姿に変えられる。

世界が減びても、いかなることがあつても、キリストは再び神の力に包まれてこられる。そし

て、それは聖霊によって知らされる。

「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」(ヨハネ十六・13)

科学技術や社会変革、医学、人間の思想などの力では、魂の救い、究極的な希望は与えられない。キリストを信じることよってのみいかなることにも揺るがない希望が与えられる。

○8月15日(日) 主日礼拝
「ロゴスなるキリスト」

ヨハネー・155 会
場11名 スカイプ39名

初めに「言(言語ではロゴス)」があった、と聖書は記している。その「ロゴスは神と共にあり、神であった」とある。これは「ことば」と訳されているが、当然人間が話す言葉ではない。神の言葉である。

神の言葉がどれだけ重要であるか。聖書のはじめからそれは記されている。聖書は人間の思想ではない。神が人に啓示して書かせたのである。

だから、全世界に通じ、広がっている。

神をはじめに言われた言葉。それは「光あれ」である。初めにロゴスがあった、ということと同じである。そして、神の言葉によって、すべては創造された。自然もすべて神が造られた。

信仰の父と言われる、アブラハムが突然変わったのは、神が言われたからである。神に行きなさい、といわれて、不思議な力に導かれて進んでいった。アブラハムの信仰も神の言葉から始まったのである。

キリストが生まれる700年前に、イザヤは神の言葉によつてキリストが来られることを預言された。

キリストの弟子たちは、キリストに「わたしに従って来なさい」という言葉をかけられて従った。パウロも復活したキリストに「サウロよ」という言葉をかけられて、目が開かれた。初めにキリストからの言葉があったのである。

どんな弱い人、寝たきりの人であっても、神の言葉が与えられるとそこから導かれていく。

今、一番必要なのは、神のことばである。コロナ感染が広がり、また災害が次々と起こっているこの世界で、わたしたちはコロナの終息、また災害からの復興を祈るだけではなく、人々がそこから人がキリストに立ち返るように、真実の神を信じるようにと祈るべきである。

とくに敗戦記念の日であるきょう、日本人は戦争を始めて、他の国に大きな罪を犯した。しかしその罪の歴史をほとんど知らない。日本に神の言葉が与えられ、罪を知り、真実の神に立ち帰るようにと祈り願う

○8月22日(日) 主日礼拝

・主題「神の愛そのものとしての三位一体」ヨハネーの13

・参加者 会場 9名
スカイプ 48名

神とキリスト、聖霊が同じである。それは特に大事であるからヨハネ福音書の最初から示されている。

初めにロゴスがあった。神と共にあった。ロゴスが万物の創造者であると記されている。神だけがはじめからあるのではなく、ロゴスと共に初めからあった。ロゴスはイエス・キリストのことである。

ヨハネはキリストが神であることを啓示された。それは学問や科学ではわからない。キリストがなぜ生まれたか。イエスとして、人間として生まれ、本当に貧しい人、弱い人、汚れた人のところに行つて、癒された。強いものが勝つという、この世の中で、弱いものを見出し、探して、救いに来てくださる。それが神のご意志でありキリストなのである。

聖霊は、戸をかたく閉じているところにも来られる。聖霊は、風のようにこられる。「霊」とは原語は「ルーアハ」であり、意味は風、息、という意味がある。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌(形なく空虚)

であって、闇が深淵の面において、神の霊が水の面を動いていた。(神からの風が水の上面を吹き続けている。) 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。」(創世記一・1〜3)

これは人間の状態を示している。闇の中、空しく、すぎるものもない。そこに神からの風が吹いていた。

キリストが神である。それは聖書のいくつかの個所にも記されている。

へブル書一章では「御子によって世界は創造され、万物を支えている」とある

コロサイ一章には「キリストは見えない神の形であり、万物は御子によって創造された」とある。

神とキリストは同じであると言うことは繰り返し記されている。

この真理を受け取らない人に対して、その人のために

祈ることが必要である。

「主」という言葉は、旧約聖書では神に対して使われていた。しかし、「主」とは神とキリストを指す。

トマスが「イエスの傷に触れなければ信じられない」と言っていたが、啓示を受け「わが主、わが神」と告白した。疑い深いトマスと言われているがトマスに与えられた啓示が大事なのである。

キリストが神と同じであるから、万人の罪を負い死んで罪を赦すことができた。神が愛であるからである。

○8月29日(日) 主日礼拝

「命、光、水、聖霊」ヨハネ一・4〜5 会場11名 スカイプ52名

「言のうちに命があった」とある。「言」とは原語では「ロゴス」であり、それは生まれる前のキリストをさしている。そのロゴスなるキリス

トに、まず「命」があった。これは生物学的な命を指すのではない。キリストを信じる者は死んでも、そのあと神のもとで復活の命が与えられる。この命のことをさす。

人間に必要なのは、体の命ではなく、復活の命であり、それを受けるために必要な罪の赦しである。その命をうけて苦しんでいる人のことを思う。大事なのは、罪からの救いなのである。

命なる言葉とは何か。騒々しい今の時代、いつそうこの命の言葉が必要となる。そして、どのように混乱した時代が来ても、この神の言葉を受けとる人を神が起しされる。

ヨハネの福音書が書かれた目的は何か。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(ヨハネ20の31)

お知らせ

○北海道 瀬棚聖書集会

例年は、夏に開催されているのですが、コロナのために、昨年そして今年もオンラインでの集会となりました。どなたでも参加できます。

・日時：11月22日20時〜24日(水) 15時 オンライン集会

・主題：恵みと感謝

・講師 吉村孝雄(徳島聖書キリスト集会代表)

石橋 隆広(日本基督教団利別教会牧師)

・申込先 野中 信成

nobunari@mac.com

○「野の花」文集原稿募集
・字数：2000字以内。

・原稿提出期限：10月末日

・送付先：〒770-0868 徳島市福島一丁目6-42 林晴美気付
吉村孝雄宛て

編著者・発行人 吉村孝雄(徳島聖書キリスト集会代表)

〒七七三〇〇一五

小松島市中田町字西山九一の一四

携帯電話 080-6284-3712

固定 0885-32-3017 (FAX 共)

E-mail: emuna@ace.ocn.ne.jp 1)の「いのちの水」誌の出版、送付は読者の方々の自由な協力で支えられています。協力費の送付は、郵便振替口座でお願い

します。番号は、〇一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 なお、200円以下の少額切手、古い未使用切手でも可です。http://pistis.jp